



「クリスマスツリー」

理事長 バジル 八代 智

いよいよクリスマスがすぐそこまでやってきました。町中にクリスマスツリーが飾られているのを目にしますと、今年もこの季節がやってきたな～と実感します。

そもそもこのクリスマスツリーの発祥はといいますと、いろんな説があるのですが、有名なのが聖ボニフェースの物語です。聖ボニフェースという人は、ドイツ語で聖ボニファティウスと言われ、8世紀初頭に当時のローマ教皇グレゴリウス2世より命を受けて、現在のドイツにあたるガイスマーという地域にキリスト教伝道に行きました。

当時ヨーロッパではトールという神話に出てくる雷の神様に対する信仰が根強く、ボニフェースが伝道に行った時にも、トール神を祭るさまざまなお祭りがなされておりました。その中で彼が激怒したのが、トール神をなだめるために村の少女を大きな樅の木にくくりつけて生贄にするというものでした。これを見たボニフェースはおもむろに斧を持ち出して、村人たちの前でその樅の木を切り倒したというのです。

村人たちはご神木である樅の木を切り倒した彼にきっとトール神の罰が当たって雷に打たれて死ぬだろうと思っていたのですが、それに対して彼は「もしこの木が聖なる木であるならば、今すぐオレに雷を落とせ！」とトール神に向かって叫びました。

結局トール神からは何の罰も当たらなかったことから、村人たちは彼の言ったことが本当だと、今度は彼をあがめてキリスト教の神様を信じるようになりました。そして切り倒した樅の木の近くに生えていた小さなモミの木に少女ではなく小さな飾りを着け、それを御子イエス・キリストのシンボルとしたと言われています。今この出来事があったとされる所にはフリッツラー大聖堂という大きな聖堂が建立されており、今も聖ボニフェースが讃えられています。また彼は現在もドイツの守護聖人として、広くドイツ国民からも愛されています。

さらには、このクリスマスツリーに初めて明かりを灯したのも、これまたドイツで非常に有名な宗教改革者のマルチン・ルターと言われています。彼が夜、モミの木の林道を歩いていると、木と木の間にいくつもの星の光が見えて、それが大層きれいであったことから、早速その年のクリスマスツリーに何本ものろうそくをくくり付けて灯したと言われています。この後、現在のように電飾で色鮮やかなクリスマスツリーとなるには、エジソンの電球発明まで待たねばなりませんでした。それまではろうそくを灯すご家庭も多かったようです。

いずれにしても火というものは、わたしたちの心に何ともいえない暖かな気持ちをもたらしてくれます。マタイによる福音書の中で主イエスは次のように言っています。「**体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁っていれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう。**」

以前、藤倉先生と一緒に学生たちとフィリピンに引率で行った時、子供たちの目の輝きにビックリしました。確かにフィリピンの子供たちは日本に住むわたしたちよりもはるかに貧しいですが、瞳の輝きは裕福な日本人よりもはるかにキラキラしていたのです。

一体金持ちではあるけれどいつも難しい顔をしている日本人と、貧しいながらもニコニコしているフィリピン人とではどちらが本当に幸せなんだろうと、その時の学生たちと真剣に話し合ったほどです。

わたしたちもクリスマスツリーだけでなく、わたしたち一人ひとりの心の中のともし火も輝かせ、心穏やかに、そして周りの人たちを暖かくさせる、そういった優しい瞳のともし火を照らし続けたいものです。今年のクリスマス、皆さんそれぞれが神様に祝された素晴らしいクリスマスを迎えられますよう祈っています。

